

令和 3 年 6 月 27 日現在

機関番号：33503

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23089

研究課題名(和文) マーク・トウェイン初期作品における自伝的構築と北米先住民表象の黙說的連関

研究課題名(英文) Refraction and Dislocation: The Representation of Native Americans in Mark Twain's Early Works

研究代表者

杉村 篤志 (SUGIMURA, Atsushi)

山梨英和大学・人間文化学部・講師

研究者番号：70846667

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：1850年代から1860年代にかけてのマーク・トウェインの最初期の断章、雑誌記事などにおけるネイティブ・アメリカン表象と、そこに内包される屈曲された自伝性を精査した。また、「マニフェスト・デスティニー」の拡張主義のもとで沈黙・周縁化されてきた先住民迫害史への関心をもとに、トウェインの口語的語りの後続世代への影響を再吟味するうえで重要な位置を占める作家シャーウッド・アンダソン『卵の勝利』の研究を行った。論文「卵のかなしみ -- シャーウッド・アンダソン『卵の勝利』における人種、重力、発話困難性」を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1990年代にLucy Maddoxらによって指摘されてきた「米文学研究におけるネイティブ・アメリカンの周縁化」の問題はトウェイン研究史においても例外ではなく、先住民の存在を主たる検討主題とする包括的研究は、2018年のKerry Driscoll, Mark Twain Among the Indians and Other Indigenous Peoplesの刊行を待たねばならなかった。本研究は、Maddoxらが提示した問題意識への現代的応答であるとともに、トウェイン最初期作品における先住民表象に内包される自伝的含意の精査を通して、Driscollの研究成果を発展的に継承するものである。

研究成果の概要(英文)：This study explored the subtle but subversive autobiographical elements embedded in the varied, often seriously prejudiced, portrayals of Native Americans in Mark Twain's early works. I also reexamined the writings of Sherwood Anderson, a unique follower of Mark Twain's colloquial narrative style, with special interest in Anderson's representation of indigenous people and his vision of America as a land that "still belongs to a race who in their physical life are now dead." Based on this research, I published a paper titled "The Sadness of the Egg: Race, Gravity, and Inarticulacy in Sherwood Anderson's The Triumph of the Egg."

研究分野：アメリカ文学

キーワード：マーク・トウェイン ネイティブ・アメリカン 南北戦争 自伝 良心 シャーウッド・アンダソン

1. 研究開始当初の背景

マーク・トウェインが晩年に至るまで差別的ネイティブ・アメリカン像を自作の中で繰り返し提示し続けたという事実は、主流派研究者によってしばしば等閑視されてきた。これについては、オーセージ系研究者 **Carter Revard** の 1999 年の論考 “Why Mark Twain Murdered Injun Joe: And Will Never Be Indicted” において詳細に論じられている。**Susan Kalter** もまた “A **Savagist Abroad: Anti-Colonial Theory and the Quiet Violence in Twain’s Western Oeuvre**” (2011) において同様の点を指摘している。2018 年、カリフォルニア大学出版局より刊行された **Kerry Driscoll, Mark Twain Among the Indians and Other Indigenous Peoples** (2018) はトウェイン研究史においてはじめて先住民表象を中心的検討主題として設定した研究書であり、トウェイン研究史上の空隙を埋める意味で重要な著作であるが、トウェインの先住民表象の複雑性を把握するためには、さらなる検討が必要であると考えられる。

2. 研究の目的

上記の研究状況を踏まえて、本研究は、トウェインの最初期テキストにおける自伝的構築と北米先住民表象の連関を、19 世紀合衆国の対先住民政策の変遷と「自己放逐した南部人」としての作者の倫理的葛藤に照らして検証することを目指した。トウェイン・ペルソナによって抑圧された「南部白人クレメンズの声」の開示/隠蔽をめぐる相克状況に着目して、トウェイン最初期の断章、書簡、雑誌記事などにおける「分裂した自己像の転置の対象」としての北米先住民像の搾取の利用の諸相を分析した。

3. 研究の方法

トウェインがその作品において提示した自伝的自己像の真正性の疑わしさは、晩年の **Autobiography** における回避的態度と併せて、**Dixon Wecter** や **James M. Cox** らによって議論されてきた。**The Author-Cat** (2007) において **Forrest G. Robinson** は、南部奴隷制度をめぐるトウェインの人種の罪悪感を焦点化して、「自己の最悪の部分」の開示をめぐる心的葛藤をトウェイン作品に通底する根本動因とみなしている。本研究は、トウェイン作品の自伝性をめぐるこれらの先行研究の成果を、冒頭に記した近年の **Driscoll** らによる先住民表象研究の成果に発展的に接続することを目指す。

4. 研究成果

マーク・トウェインの最初期テキストにおける先住民表象とその自伝的含意については概ね予定通り研究を進めることができたが、**COVID-19** の世界的感染拡大の影響を受けて、予定されていた米国カリフォルニア大学バークレー校での一次資料調査を行うことができず、1870 年代のテキストに関しては当初の予定通りに研究を完遂することが難しい状況になった。また、参加を予定していた国際学会、第 9 回 **International Conference on the State of Mark Twain Studies** も 2022 年に延期となった。

国内で研究を継続するにあたり、トウェインの口語的語りの後続世代への影響を再吟味するうえで重要な位置を占める作家シャーウッド・アンダソンの『ワインズバーグ、オハイオ』および『卵の勝利』の研究を行った(ウィリアム・フォークナーは 1953 年に『アトランティック・マンズリー』に寄稿したアンダソン論 “Sherwood Anderson: An Appreciation” においてトウェインをアンダソンの「父」と呼んでいる)。アメリカの土地所有権の問題に焦点をあてて『卵の勝利』における人種表象を複層的に精査し、研究成果を論文「卵のかなしみ——シャーウッド・アンダソン『卵の勝利』における人種、重力、発話困難性」として発表した。

同論文では、「マニフェスト・デスティニー」の拡張主義のもとで沈黙・周縁化されてきた先住民迫害史への関心とともに、**Margaret E. Wright-Cleveland** が “Mentoring American Racial Identity: Sherwood Anderson’s Lessons to Ernest Hemingway” (2011) で指摘したアンダソンの「文学的ナショナリズム」に着目して、『卵の勝利』における人種表象を詳細に検討した。1938 年 3 月 30 日、友人ロジャー・サーゲルに宛てた書簡においてアンダソンは、白人の生/日常に見いだされる本質的な不充足の感覚がアメリカの「大地」からの疎外状況からもたらされていることを示唆しており、このことに照らして、『卵の勝利』の人物たちの孤立状況や内面の傷つきやすさとアメリカの土地所有権の問題の連関を精査し、アンダソンの人物たちの表出困難な欲望のありかたを、人種暴力をめぐる「アメリカの原罪」の文脈に照らして再定義した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 杉村篤志	4. 巻 19
2. 論文標題 卵のかなしみ - シャーウッド・アンダソン『卵の勝利』における 人種、重力、発話困難性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山梨英和大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24628/yeiwa.19.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------